(19)日本国特許庁(JP)

# (12) 公 表 特 許 公 報 (A)

(11)特許出願公表番号 特表平6-503477

第1部門第1区分

(43)公表日 平成6年(1994)4月21日

(51) Int.Cl.\*

識別記号 庁内整理番号

C 1 2 P 21/00 Z 8214-4B

FΙ

### 審査請求 未請求 予備審査請求 未請求(全 9 頁)

(21)出願番号 (71)出願人 プロメガ・コーポレーション 特願平5-507150 (86) (22)出顧日 平成4年(1992)10月7日 アメリカ合衆国ウィスコンシン州53711. (85) 翻訳文提出日 平成5年(1993)6月11日 マディソン。ウッズ・ホロー・ロード (86)国際出願番号 PCT/US92/08518 2800 (87)国際公開番号 WO93/07287 (72) 発明者 トンプソン、デーヴィッド・プイ (87)国際公開日 平成5年(1993)4月15日 アメリカ合衆国ウィスコンシン州53716, (31)優先檔主張番号 775, 136 モノナ、ウエスト・ディーン・アペニュー 1991年10月11日 (32)優先日 611 (33)優先権主張国 米国(US) (72) 発明者 ヴァン・オースプリー、トーマス・アール EP(AT, BE, CH, DE, アメリカ合衆国ウィスコンシン州53705。 (81)指定国 DK, ES, FR, GB, GR, IE, IT, LU, M マディソン、コモンウェルス 2123 C. NL, SE), AU, JP (74)代理人 弁理士 湯浅 恭三 (外5名)

## (54) 【発明の名称】 真核無細胞抽出物中での転写と翻訳の共役

# (57) 【要約】

真核無細胞抽出物からなる溶液を使用して、マグネシウム濃度をRNAがDNAから転写されそしてRNAがタンパク質に翻訳される値に高めるのに十分な量のマグネシウム化合物を上記抽出物に添加することからなるDNAから転写と翻訳を共役させる方法。

#### 請求の範囲

- 1. RNAがDNAから配写され且つRNAがタンパク質に翻訳される水準に マグネシウム達度を高めるのに十分な量のマグネシウム化合物を真球無細胞抽出 物に加えることからなる上記抽出物中でDNAからの配写と翻訳を共役させる方 は.
- 2. 上記信出物がウサギ朝状券血球溶解物である糖求項1に記載の方法。
- 3、上記長許マグネシウム濃度が約2.5mXから約3.5mXである請求項2に記載の方法。
- 4. 上記最終マグネシウム濃度が約2.6mlがら約3.0mlである鏡攻項2に記載の方法。
- 5. ポリアミンが上記溶解物に添加される請求項2に記載の方法。
- 6、上記ポリアミンがスペルミジンである請求項5に記載の方法。
- 7. 上記スペルミジンも上記溶解物に加えて約0.2㎡から約0.4㎡の濃度にする 雑文項6に記載の方法。
- 8. 上記停解物のカリウム濃度を約40miから約100miに調整する競技項2に記載の方法。
- 9. 内因性リボヌクレアーゼを効果的に不活性化するのに十分な量のリボヌクレアーゼインとビターを上配溶解物に抵加することを含む請求項2に記載の方法。
- 10. 上記リポヌクレアーゼインヒピターがRNasinである論求項9に記載の方法。
- 11. 転写と翻訳の共役に必要な過知成分を上記溶解物に添加することを含む 請求項2に記載の方法。
- 12. 上記追加成分の1つがRNAポリメラーゼからなる調求項11に記載の方法。
- 13. 上記ポリメラーゼがSP6、T7およびT3 RNAポリメラーゼからなる群から選択される論求項12に記載の方法。
- 1.4. DNA胂型が上記溶解物に添加される精水項2に記載の方法。
- 15. 上記DNA解型が複数のクローニング領域を有する譲収項14に記載の方法。
- 30. 上記リポヌクレアーゼインヒビターがRNasinである鎮攻項29に記載の方法。
- 31. 転耳と翻訳の共役に必要な追加成分が上記溶解物に感知されることを含む傾攻項22に記載の方法。
- 3.2. 上記追加成分の1つかRNAポリメラーゼからなる調求項3.1に記載の方法。
- 33. 上記ポリメラーゼかSP6、T7およびT3 RNAポリメラーゼからなる舞から選択される関攻項32に記載の方法。
- 34. DNA貨型が上記抽出物に添加される額水項22に記載の方法。
- 35. 上記DNA無量が複数のクローニング領域を育する観水項34に記載の方法。
- 36. ポリメラーゼブロモーター配列が上記複数のクローニング領域の1万の 末端に位置している調求項35に記載の方法。
- 37. 上記接数のクローニング領域へのクローニングによってRNAポリメラーゼプロモーターが5、末端にそしてポリA配列が3、末端に位置する遺伝子が生じるように、上記練型が上記複数のクローニング領域の反対例末端にポリA配列を有する請求項36に記載の方法。
- 38. 上記プロモーター配列に対応しているポリメラーゼが上記協出物に添加される講求項36に記載の方法。
- 39. 上記DNA輪製が、ポリメラーだ競反応として知られる方法によって製造された組コイル分子、共有的周環状分子、線状分子またはDNA新片からなる群から選択される形態である雑次項34に記載の方法。
- 40. DNAからRNAの翻訳を可能にするのに十分な量のリポヌクレオチドニリン酸が上記信出物に添加されることを含む請求項22に記載の方法。
- 4.1. 上記リボヌクレオチドミリン酸が0.4mXのCTP、0.4mXのUTP、0.5m MのGTPおよび1.6mXのATPの値で上記憶出物に添加される調求項4.0に記載 の方法。
- 4.2. 請求項1に従って課製された、修正された異核無細粒抽出物。
- 43. 請求項42に記載の抽出物を含有する容器からなるキット。

- 16. ポリメラーゼプロモーター配列が上記複数のクローニング領域の1方の 実践に位置している旗次項15に記載の方法。
- 17. 上記憶数のクローニング領域へのクローニングによってRNAポリメラーゼプロモーターが5、末端にそしてポリA配列が3、末端に位置する遺伝子が生じるように、上記舞型が上記憶数のクローニング領域の反対側末端にポリA配列を有する諱求項16に記載の方法。
- 18. 上記プロモーター配列に対応しているポリノラーゼが上記溶解物に添加される物水項18に記載の方法。
- 19. 上記DNA無型が、ポリノラーゼ競反応として知られる方法によって設 連された超コイル分子、共有的関連状分子、模状分子またはDNA断片からなる 舞から裏切される影響である環境項14に記載の方法。
- 20. DNAからRNAの転写を可能にするのに十分な量のリポアクレオチド エリン酸が上記数解物に添加されることを含む鎖水項2に記載の方法。
- 2.1. 上記時解物に上記リポタクレオチド三リン酸が各々0.4mmi添加される線 攻項2.0に記載の方法。
- 2.2. 上記抽出物が小麦胚芽抽出物である請求項1に記載の方法。
- 23. 上記最終マグネシウム濃度が約3. Qaliから約5. 25ellである額収項 2.2 に記載の方法。
- 24、上記表終マグネシウム歴度が約4.0mmから約4.75mmである兼求項22に 記載の方法。
- 25. ポリアミンが上記抽出物に添加される論攻項22に記載の方法。
- 28. 上記ポリアミンがスペルミジンである請求項25に記載の方法。
- 2.7. 上紀スペルミジンを上記抽出物に添加して約0.2mlがら0.9mlの濃度にする絶文項2.6に記載の方法。
- 28. 上記館出物のカリウム濃度が約50milから約150milに調整される請求項2 2に記載の方法。
- 29. 内因性リポヌクレアーゼを効果的に不活性化するのに十分な量のリポヌクレアーゼインセピターが上紀落ಳ物に添加されることも含む鍵球項22に記載の方法。
- 4.4. 錦水項5または鏡水項2.5に従って開設された、修正された真接無程を 抽出物。
- 45. 請求項44に記載の抽出物を含有する容器からなるキット。
- 46. 鏡攻項12または鎖攻項32に従って調製された、修正された真核無知 物拍出物。
- 47、請求項46に記載の抽出物を含有する容器からなるキット。
- 48、特定のポリメラーゼプロモーター配列を有するDNA的型から熔線中で 転写と翻訳の共役によってタンパク質を製造する方法であって、譲方法は貫稼無 細胞抽出物の酵車的な調製物の熔液を調製し、転写と翻訳を支えるのに十分な調 度のリポヌクレオチドミリン酸、アミノ酸および上記時型DNAの上記プロモー ターに対応しているポリメラーゼで上配抽出物溶液を修正し、そしてRNAが上 記DNA時型から転写され且つ並RNAがタンパク質に翻訳される水準に最終マ グネシウム濃度を上昇させるのに十分な量のマグネシウム化合物を上配抽出物溶 液に添加することからなる方法。
- 49. 上記始出物溶液混合物中のマグネシウムの最終濃度が約0.5mg上昇させられる排水項48に記載の方法。
- 50. 上記胎出物がウサギ糖状界血球溶解物である油水項48に記載の方法。
- 51. 上記最終マグネシウム濃度が約2.5mlがら約3.5mlである調求項50に記 数の方法。
- 5.2. 上記長時マグネシウム濃度が約2.6mlから約3.0mlである額求項5.0に記載の方法。
- 53、ポリアミンが上紀溶液に添加される鉄水項50に配載の方法。
- 54、上記ポリアミンがスペルミジンである請求項53に記載の方法。
- 35、上紀スペルミジンを上記店被に添加して約0.2mmから約0.4mmの適度にする網水項54に記載の方法。
- 56. 上紀彦液のカリウム濃度が約40kMから約100kMに調整される鏡求項50 に記載の方法。
- 57. 内辺性リポヌクレアーゼを効果的に不活性化するのに十分な量のリポヌクレアーゼインヒビターが上記格故に必知されることを含む請求項50に記載の

方柱。

- 58. 上記リポヌクレアーゼインヒビターがR Nasinである誠永項57に記載の方法。
- 59. 転導と翻訳の共役に必要な過知成分が上記格検に絶知されることを含む 請求項50に記載の方法。
- 60. 上記過加収分の1つがRNAポリメラーゼを含む請求項59に配載の方法。
- 61. 上記ポリメラーゼかSP6、下7および下3 RNAポリメラーゼから なる群から選択される雑炊項60に記載の方法。
- 62. 上記DNA時型が、ポリメラーゼ領反応として知られる方法によって製造された超コイル分子、共有的開頭状分子、親状分子またはDNA断片からなる 関から選択される影響である領水項50に記載の方法。
- 6.2. 上記DNA制型が複数のクローニング領域を育する請求項5.0 に記載の方法。
- 64. ポリメラーゼプロモーター配列が上記複数のクローニング領域の1方の 末端に位置している値水項63に記載の方法。
- 65. 上記複数のクローニング領域へのクローニングによってRNAポリメラ ーゼプロモーターが5\* 末端にそしてポリA配割が3\*末端に位置する遺伝子が生 じるように、上記時質が上記複数のクローニング領域の反対刺来端にポリA配列 を育する領水項64に記載の方法。
- 6.6. 上記溶液に上記りポヌクレオチド三リン酸が各 $\circ$ 0. ( $\bullet$ 1.55加される領水項5.0に記載の方法。
- 67. 上記抽出物が小麦胚芽抽出物である鎖水項48に記載の方法。
- 68. 上記最終マグネシウム濃度が約3.0mmから約5.25mmである鏡水項67に 記載の方法。
- 69. 上記最終マグネシウム濃度が約4.0mMから約4.75mMである調水項68に 記載の方法。
- 70. ポリアミンが上記溶液に添加される鎮水項67に記載の方法。
- 7.1. 上記ポリアミンがスペルミジンである雑水項7.0に記載の方法。

#### 明湖春

### 真核無細胞抽出物中での転写と翻訳の共役

### 発明の背景

本見明は一般に分子生物学に陥し、そして更に詳細には真核細胞溶解物または 他の抽出物中で美型DNAからRNAの転写と線RNAの翻訳を共役させること ができる新規方法に関するものである。

組動中の遺伝子の転写と翻訳(発現)に係わる政略は非常に復雑でありそして 未だ完全には理解されていない。しかし年ら、タンパク質をDNAから製造する ためには従わなければならない基本的なパターンがある。DNAは最初にRNA に転写され、次いでそのRNAが機をの細胞成分の相互作用によってタンパク質 に翻訳される。原核細胞(細菌)では転写と翻訳は「共役しており(coupled)」、 これはRNAがDNAから転写されている時間中にRNAがタンパク質に翻訳さ れることを意味する。真核細胞(動物、物物)では、この2つの作用は別報であ り、全体の過程ははるかにより一層複雑化されている。DNAは細胞の核内部で RNAに転写されるが、RNAは更にmRNAにプロセシングされ、そして次い でmRNAはタンパク質に翻訳される核外の細胞質に輸送される。

分子生物学者が退伝子を単位しクローン化できそして郵的から特定のIRRNAまたは「メッセージ」を単数できるので、これらの遺伝子またはメッセージを発現させるために使用し得る系が必要となった。遺伝子の発現は遺伝子の鞭旋と調節を全体的に理解するために重要である。タンパク質を迅速に発現させる方法が現在利用でき、これは遺伝子を操作し次いでその機能に与える操作の影響の研究を可能にしている。原生すべきタンパク質の量、遺伝子が原核生物であるのかまたは真核生物であるのか、およびインビトロ系またはインビが系の相対的な利点は、発展系を選択するときに研究者が考慮するファクターの機つかである。系の過収は研究される遺伝子によって影響される。殆どの場合、原核生物遺伝子は原体生物系で最も良く発現され、そして真核生物源伝子は其核生物系で一種効率良く且の正確に発現される。これは、多くの質如配列およびプロモーターは環默す

- 7.2. 上記辞機に上記スペルミジンを添加して約0.2mgから約0.9mgの濃度にする協定項7.1に記載の方法。
- 73. 上記階級のカリウム過度が約50mjから約150mjに調整される額求項67 に記載の方法。
- 7.4. 内因性リポヌクレアーゼを効果的に不悪性化するのに十分な量のリポヌクレアーゼインヒビターが上配溶液に添加されることを含む領水項6.7 に記載の方法。
- 7.5. 上記りボヌクレアーゼインとビターがR Nasinである論求項7.4に記載の方法。
- 76、転率と関択の共役に必要な追加成分が上記療液に最加されることを含む 建水項67に記載の方法。
- 77. 上記追加成分がRNAポリメラーゼからなる請求項78に記載の方法。
- 78. 上記ポリメラーゼから P6、T7およびT3 RNAポリメラーゼからなる群から最終される線水項77に記載の方法。
- 79. 上記DNA調整が、ポリメラーゼ酸反応として知られる方法によって製造された昭コイル分子、共有的開策状分子、線状分子またはDNA断片からなる 野から表現される形理である触点項 6.7 に記載の方法。
- 80. 上記DNA輸型が複数のクローニング模域を有する関攻項67に記載の方法。
- 81. ポリメラーゼプロモーター配列が上記複数のクローニング領域の1方の 末端に位置している第次項80に記載の方法。
- 82. 上記憶飲のクローニング領域へのクローニングによってRNAポリメラーゼプロモーターが5\*末端にそしてポリA配列が3\*末端に位置する遺伝子が生じるように、上記時型が上記複数のクローニング領域の反対倒束端にポリA配列を育する韓水項81に記載の方法。
- 83. 上記リポヌクレオチドニリン酸が0.4mmのCTP、0.4mmのUTP、0.5mmのGTPおよび1.6emのATPの値で上記搭按に抵加される線球項67に記載の方法。

る系で一種効率員く認識されるためである。遺伝子の発現はインビボおよびイン ビトロ系の両方で達成することができる。

原復または真複細胞を使用するインビボ転写系は利用可能であるが、これらの 系は無傷の細胞が使用されるので操作が困難である。他方、インビトロ系はDN AまたはRNAをタンパク質に翻訳するために必要な成分を全て含有する原度ま たは真核細胞から製造された無細胞抽出物から製造される。無細胞抽出物は大場 菌(E. coli)のような原核細胞並びにウサギ糖状赤血球および小麦胚芽のよう な真核細胞から調製することができる。無細胞系は、それらの偏製に利用できる 概単的なプロトコールが存在しそして多数の供給数から市販で入手できるので、 非常に一般的である。

大幅書 S 30無細胞抽出物はズベイ (Zubay)、 G. によって最初に記載された (1 973、Ann. Rev. Genet.、7 他、267頁)。これらの抽出物は発表されるべき遺伝子が適当な原復生物調即配列、例えばプロモーターやリポソーム結合部位を有するベクター中にクローン化されたときに使用することができる。原核生物大馬商無器施系は、抽出物へのDNAの添加後に転草と翻訳が同時に生起するので、「共役している」と考えられる。大馬ធ抽出物中で美型としてRNAを使用するとタンパク質が生成するが、このような反応は共役してはいない。ウサギ朝状界血球溶解初と小便応穿加出物は好ましくは、具体生物遺伝子またはmRNAの発表に使用される。両系共、真核生物系は底に述べたように共役していないので、タンパク質翻収の典型としてRNAを使用することが必要である。

ウサギ朝伏弥加球店解物はベルハム (Pelban)、E.E.B. およびジャクソン (Jachson)、R.J. によって記載された (1976、Eur. J. Biochem、131後、289質)。この発現系は多分インビトロ翻訳に最も広範に使用されている無郷拠系であり、モしてmRNA種の同定、それらの数生物の特徴決定、転写と無訳の創趣の研究に使用される。シグナルペプチド開製およびコア グリコシル化のようなプロセシングはイヌのミクロゾーム概を領準的な翻訳反応に加えることによって試載される (Walter, P. および Biobel, G. (1983) Netb. Entysol, S6、50)。ウサギ朝状弥加球部規制はまた、アセチル化、イソプレニル化、タンパク質分解および或る種のリン酸化活性を含む種々の転写後プロセシング活性も有している(Gia

#### ss. C. A. Pollard. K. W. (1990) Promega Nature. 26).

小便区芽摘出物はロバーツ (Roberts). B.C. およびパターソン (Paterson).
B.E.によって記載された (1973、Proc. Natl. Acad. Sci. USA、70巻、2330頁)。
小要胚芽の無態陰池出物は多種のウイルスおよび他の顕映生物のRNA並びに異 独生物のmRNAのインビトロでの翻訳を支えている。 (Anderson. C. 等 (198 3) Yeth. Enzysol. 101、635)。一般に、小変胚芽植出物にはリボタクレアーゼ 活性が存在しているので、小変胚芽類収系の反応混合物中にリボヌクレアーゼイ ンヒビターを含んでいることが必要と思られている。

朝沢研究用のRNAはmRNAを季離するかまたはRNAポリメラーゼプロモーターを有するベクターにクローン化されているDNAからインビトロでRNA 毎写物を製造するかのいずれかによって得られる。第1の方法は細胞から直接m RNAまたは「メッセージ」を単粒する。

第2の方法はインビトロ転写によってインビトロ翻訳用のRNAを得る。ファージポリメラーゼプロモーターの後にクローン化されたDNAのインビトロ転写はクリーク (Krieq)、P、およびメルトン (Meiton)、D、によって記載された (1984、Mucl. Acida Res.、12巻、7057頁)。これはインビトロ翻訳反応に使用するためにクローン化した遺伝子からRNAを得る機能的な方法となった。この方法は問題のDNAまたは遺伝子が次のRNAポリメラーゼ、即ちSP6、T7またはT3のうちの1つのプロモーターを有するベクター中にクローン化されることが必要である。次いで、このベクターはクローン化された遺伝子の3、末端で制限酵素を使用して疎状化され、次いでインビトロ転写反応によってRNA転写を行う。SP6、T7およびT3 RNAポリメラーゼプロモーターを有する多数のベクターは市販で人手可能でありそしてDNAのクローニングに広範に使用されている。

いずれにしても、ウサギ観状赤血球溶解物または小表胚芽系に使用されるRN A 転写物を得るプロセスは翻訳反応の効率に影響を与える要素を導入する。RN A はリポヌクレアーゼで容易に分解されるので、RNAを用いて操作するときに は常に特別の注意を払わなければならない。DNA 辨型ははるかにより安定であ る。

さなければならない。このタイプの系はRNA特型を導入するとき大機費S30抽出物および小麦胚芽抽出物で良好に作用する。スピリン(Spirin)等(1988、Science、242種、1162~1164参照。このシステムはまたウサギ糖状界血球溶解物でRNA轉型を使用しても作用する。リャポパ(Ryabova)等(1989)、Nucl. Acid Res、17種、11号、4412参照。この系はまた大量費S30抽出物中でDNA轉型を使用しても良好に作用することが知られている。バラノフ(Baranov)等(1988)、Gene、84種、483~486参照。PCT公開WO9102076は真核生物溶解物を使用するDMA转型からの連続的な無細物翻訳を展示している。

連続反応は10時間から約100時間まで程々に実施され、そして組み立て且つ実 施するためには時間および供給源のかなりの投資が必要である。「連続」系での 課訳はまた大量のタンパク質を歴生させる方向にも向けられており、そして概學 的な(静度)インビトロ翻訳反応とかなり異なっている。静度反応は少ない反応 容量で、典型的にはマイクロリットルで創定される量で行うことができ、そして それはしばしば1万至2時間で実結される。静度類訳反応は四数量(ミリグラム) のタンパク質を度生する方向には向けられていない。静度反応は一般に、研究的 用途、例えばmRNA種の両定、特徴決定または転写むしくは翻訳制節の研究用 にタンパク質を歴生させるために使用される。インビトロ翻訳で現在知られてい るウサギ朝状象血球系または小変医学系はいずれも、静度反応原合物中で転写と 類質の共役を提供していない。

### 発明の要約

それ故、本発明の1つの目的は機能的なインピトロ繋択反応で真核細胞溶解物 を使用して伸型DNAからタンパク質を製造する簡単な方法を提供することであ る。

本発明の更に特定の目的は、DNA修型によってコードをれる単一のタンパク 質の転写と親訳を共役させるために使用できる上記方法を提供することである。

もう1つの目的は真核無額的溶解物を使用する転写と翻訳の共役反応によって、 DNA無型からインビトロでのタンパク質の底生が高い方法を提供することであ ス

更にもう1つの目的は、転写と翻訳の共役実験に使用される異核細胞溶解物を

ウサギ朝伏赤血球溶解的および小液胚芽抽出物が無額腔閉訳系として開発された後、転写と翻訳を共役させる試みがなされた。翻発された1つの系は「連結されている (linked) 」転写と翻訳系であった (Roberts. B.E. 等 (1975)、Proc. Natl. Acad. Sci. USA、72色、1922~1926)。この系は小皮胚芽抽出物を使用することに保わるものでありそして大場間のRNAポリメラーゼを使用するSV40ウイルスDNAの転写と翻訳を考慮していた。この系では転写は小皮胚芽抽出物の添加直順の15分のインキュペーション設勝で生じる。これらの段階は転写に必要な緩衝液条件と回訳に必要な緩衝液条件との間の不適合性のため、そして更には両プロセスの適度要件が異なるために分離されている。この系には多くの欠点がある。1つは、多数の異なるタンパク質が同一のSV40DNA時型から同時に合成されるので、タンパク質変生物の歳生が制御されていないことである。この研究の著写は共役系が開発されたことを示しているが、共役系のデータは示されなかった。

もう1つの系はベルハム、1、R、B、等によって開発され(1978)、Eur. J. Bioc bea.、82巻、199~208、その無転写と翻訳の共役はワクシニアウイルスコア位子をウサギ観状界血球溶解物に導入した後に生じた。ウイルスDNAからワクシニアタンパク質の痩生は多分内因性ワクシニアRNAポリメラーゼによる転写とそれに硬く溶解物による翻訳によるものであった。この系は、ワクシニア以外の供給単の外因性DNAはRNAポリメラーゼによって認識されないので転写または翻訳が生起せず、ワクシニアタンパク質だけが塵生されるという事実によって制限された。ウイルスコア位子は単離しなければならず、そしてこの著者は単一のタンパク質だけを享ら歴生させることはできなかった。

タンパク質の大規模廃生に重点をおいた「連続的な」無細胞インビトロ翻訳系 を使用する研究も記載されている。連続系はより通常のパッチタイプまたは含ま れている反応容量中で生じる静度インビトロ翻訳反応とは非常に異なっている。 連続的翻訳は、大規模反応が組み立てられモしてタンパク質が長期間に亙って「連 続的に」翻訳されるパイオリアクター(例えばAuicon BIC 限外ろ過ユニット) に係わるものである。この反応には、反応の進行につれて反応中に緩衝液を供給 する必要があり、そしてまた翻訳の変生物も反応フィルターユニットから取り出

#### 製造する方法を提供することである。

更に尚もう1つの目的は転写と翻訳の共役反応に必要な1つまたはそれ以上の 成分または試養を育する上記溶解物調製物を製造する方法を提供することである。 もう1つの目的は転写と翻訳の共役実験に使用される上記調製物を提供するこ とである。

本発明の更にもう1つの目的は顕製されたウサギ糖状染血球溶解物または小麦 胚芽胎出物を有しそしてDNA跨型から転等と翻訳を共役させる反応混合物を製 造するのに必要な他の成分をしくは試薬を含有するキットを提供することである。

更に特定の目的は少なくとも1つの成分として、転写と翻訳を共役させるのに 必要な1つまたはそれ以上の試真を育する調製されたウサギ調状赤血球溶解物または小麦胚芽他出物関製物を育するキットを提供することである。

上記の目的や他の目的を達成するために、本英明は真核細胞溶解物中で転写と 親訳を共役させる方法を提供する。本方法は、RNAがDNAから転写されそし てRNAがタンパク質に翻訳される値にまで溶解物の最終マグネシウム機度を高 めるのに十分な量のマグネシウム化合物を溶解物に添加することからなる。

本発明はまた、溶液中での転率と関択の共役によって、特定のポリメラーゼプロモーター配列を有するDNA倫型からタンパク質を製造する方法も提供する。これは、真体細胞溶解物の領域的な調製物を製造し、転写と解釈を支えるのに十分な適度のリポヌクレオチド三リン酸、アミノ酸および齢質DNAのプロモーター配列に対応しているポリメラーゼで溶解物を修正し、そしてRNAがDNAから転写され且つRNAがタンパク質に翻訳される鍵にまで最終マグネシウム遺伝を高めるのに十分な量のマグネシウム化合物を上記溶液に添加することによって遺成される。DNAのプロモーター配列に精神する遺伝子に対応するタンパク質だけが製造される。

本発明は更に、RNAがDNAから転写され且つRNAがタンパク質に翻訳される値にまで是件マグネシウム濃度を高める方法に従って調製された存正実技細 物が解物を提供する。この修解物は製造中にこのように調整されたマグネシウム 濃度を育することができる。本発明はまた、転写と翻訳の共役用の真核部粒調製 が解析を含育する容器からなるキットも提供する。調弦されたマグネシウム濃度 を育することに加えて、この溶解物は転写と翻訳の共役に必要な種々の適加成分を含有することができる。含有させることができる適加成分のIつはRNAポリメラーゼである。他のものは種々の緩衝波着しくは塩または転写と翻訳の共役反応場所を最適にする他の成分者しくは減度、例えば舗延長の効率を高めることが知られているスペルミジンである。

ゥサギ朝状赤血球または小麦匹芽系での転写と既訳の共役化は、RNA時型による製造的なインビトロ翻訳と比較するとき、タンパク質症生を顕著に高め、そして共役した転写と翻訳は広範囲の分子量サイズに亘って多様な種々のタンパク質に作用することが示されている。

圏訳される遺伝子またはDNAは好ましくは、SP6、T7若しくはT3プロモーターのようなRNAポリメラーゼプロモーター、またはポリメラーゼが利用可能になる任意のRNAポリメラーゼプロモーターの後でクローン化される。DNA映型は閉環状プラスミドDNAの形態でまたは酸状プラスミドDNAとして医写と開訳の共役反応に導入される。RNAポリメラーゼプロモーター配列はまた熱震辺増幅方法によって特定のDNAフラグメントに結合させることができ、そしてこれらの様状DNAフラグメントは転写と翻訳の共役反応に使用することができる。

機体的なインビトロ翻訳反応には時間と實際を投費する必要が殆どなく、そして放反応はタンパク質を定性的に発現させるために無好に確立された方法である。 標準的なインビトロ翻訳反応でウサギ朝伏原血球溶解物または小麦胚芽胎出物を 使用して転写と翻訳を共役させることによって、別種のインビトロ転写反応の必 要性がなくなり、そしてタンパク質の癒生が顕著に高められる。かくして、ウサギ朝状原血球溶解物または小麦胚芽胎出物を使用した転写と翻訳の共役は現行の 標準的なインビトロ翻訳反応に比べて顕著な改良を提供する。予期されなかった 利益は、所提のタンパク質生成物の患生が緩進的なインビトロ翻訳反応にRNA を感知することによって見られる歴生に比べて劇的に(致修)高まることである。 更に、共役した転写と翻訳では射動のキャッピング反応の必要がない。

もう1つの利点は、特定のRNAポリメラーゼプロモーターを含育しクローン 作されるかまたは増幅されたDNA機型からタンパク質を健康できることである。

#### 性化する。

この治解物はタンパク質合成に必要な細胞収分を含有している。これらには t RNA、 r RNA、 T ミノ酸並びに開始、延長および終始因子が含まれる。この 信解物は更に、予め試験したホスホクレアチンキナーゼおよびホスホクレアチン からなるエネルギー発生系を感加することによってm RNA 翻訳が最適化される。 翻訳され得るm RNAの範囲を拡張するために t RNAの適合物や開始阻害を阻止するためにへミンも認知される。 へミンは開始因子 e l F 2 αのインヒビターのサブレッサーであるので、暫状券血球溶解物に加えられる。 へミンが存在しないと、個状券血球溶解物中のタンパク質含成は短期間のインキュペーション後に停止する (Jackson. R. および Bunt. T.、1983 Heth. In Enzysol. 96、50)。 酢酸カリウムおよび酢酸マグキシウムは大部分のm RNA 優の翻訳に掩蜒される 個で添加する。これがインビトロ翻訳で使用される機能的なウサギ朝状券血球溶解物の最終マグネシウム議度は典型的には約4、2から3、0eIの範囲であり、被溶解物は転率と翻訳の共役反応では50%比率の3のか使用される。

このようにして、プロモーターの下放の単一の遺伝子からRNAを合成するよう に指令することができ、そしてこのRNAから翻訳されるタンパク質だけが改生 まれる。このRNAが唯一のタンパク質を指令する場合には、彼反応によって程 一のタンパク質が産生される。このように使用されるプラスミドベクターは当該 技術分野で属知であり、そして使つかの供給裏から入手可能であり、研究者は所 営の任意のクローン化遺伝子からタンパク質を歴生させることができる。

本発明の他の 徴むよび利点は、以下の詳細な説明および請求の範囲を検討することによって当業者に明白となろう。

### 好ましい実施思様の説明

本発明の目的のためには、任意の真核細胞溶解物を使用することができ、そしてそれらを製造するためには多数の慣用の技術が存在する。無細胞異核細胞溶解 物は多くの理由により、少なくとも部分的にはそれらが種々の翻訳後プロセシン が活性を保持しているので、好ましい発質系である。イヌのミクロゾーム調を添 かして、シグナルペプチド脳裂およびコアグリコシル化のようなプロセシングを 試験することができる。実核細胞溶解物はまた広脳圏のウイルスおよび他の原体 生物RNA、並びに異体生物mRNAのインビトロでの翻訳を支える。

他の真体生物系も適しているが、ウサギ酸状態血管搭解物および小麦胚芽物出物が好をしい。これらの真核生物溶解物は研究者に一般的であり、そして広範に入手可能である。好をしい実施取録では、ウサギ酸状態血球溶解物はベルハム、見、およびジャクソン、見、Jによって記載され(1976、Eur. J. Bioches. 67、247~256)そして製造プロトコールし415/L418、プロメガコーボレーション(Proetga Corp.)、ウィスコンシン州マディソン、に従って修正された方法によって関盟される。概状患血球溶解的は、フェニルヒドラジンを住射したニュージーランド ホワイト ラビットから関製され、これによって各ロットで模性のある一定した観状形血球の選生が確保される。概状患血球は、最終抽出物の翻訳特性を変化させる実施観性を除生するために情報される。観状患血球を溶解させた後、抽出物はミクロコッカスヌクレアーゼおよびによこ12で処理して内因性mRNAを破壊し、そしてその結果パックグランド語訳を減少させて最小にする。次いで、EGTAを加えてCaC12をキレート化させ、それによってメクレアーゼを不活

### ウサギ朝伏赤血球溶解物(50%溶解物)の翻訳反応における 添加成分の最終濃度寄与

 クレアチンリン歌
 7a¥

 クレアチンホスホキナーゼ
 35μg/n1

 DTT
 1. 4a¥

 ウシ野職 t RNA
 35μg/n1

 砂酸カリウム
 56mf

 野酸マグネシウム
 350μ M

 ヘミン
 14. 3μ M

もう1つの好ましい実施悠様では小麦胚芽拍出物を使用する。これはロバーツ、 B.E. およびパターソン、B.E.によって記載されている方法(1973、Proc. Natl. Acad, Sci. USA、70色、第8号、2330~2324頁)、アンダーソン (Anderson). C. 9 毎によって記載されている住正 (1983、Weth, Enzymol, 101巻、635頁) に従っ て、そして製造プロトコール L418、プロメガコーポレーション、ウィスコンシ ン州マディソン、のように修正して観過することができる。一般に、小麦匹芽協 出物は抽出価値連中で小麦胚芽を粉砕し、次いで達心して細胞破片を除去するこ とによって実製される。次いで、クロマトグラフィーによって翻訳を阻害する内 因性のアミノ酸および植物類料から上横波を分離する。この抽出物もパックグラ ンド翻訳を減少させて最小にするため更にミクロコッカスヌクレアーゼで処理し て内因性mRNAを破壊する。この抽出物はtRNA、rRNA並びに開始、延 長および終結因子のようなタンパク質合成に必要な細胞成分を含有している。こ の抽出物は更に、ホスホクレアチンキナーゼおよびホスホクレアチンからなるエ ネルギー生成系を添加することによって最適化され、そして酢酸マグネシウムは 大部分のmRNA種の翻訳に推奨される値で添加する。標準的な小麦胚芽抽出物 の最終マグネシウム温度は典型的には約6、Dallから7、Sallの範囲である。

### 小麦胚芽抽出物(50%抽出物)の翻訳反応における 添加成分の最終温度等与

クレアチンリン社	10ax
クレアチンホスホキナーゼ	50 u 2/a1
DTT	5m¥
ウシ肝臓 t RNA	50 µ 2/e1
酢酸マグネシウム	3, 0~3, 75mH
詐殴カリウム	50 <b>a</b> 1
スペルミジン	0, 5all
ATP	1. 202
CTP	O, jeff
HEPES (DH1.6)	1203

共役した転写と無訳では、真核物数的解物のマグネシウム機度は添加されるマ グネシウム化合物、好ましくは塩によって調整しなければならない。好ましい塩 には塩化マグネシウムおよび酢酸マグネシウムがある。緩衝剤を添加する必要は ないが、緩衝剤の添加はpNを安定化させるため溶液として使用することができ る。転写と解訳を共役させるために、RNAがDNAから転写されそしてRNA がタンパク質に開訳される値に最終マグネシウム機度を高めるのに十分な量の塩 化または酢酸マグネシウムが停解物に添加される。この値は使用される溶解物に 位存して変化する。

領域的なウサギ朝状券血球溶解物または小変胚芽始出物に原植生物のRNAポリメラーゼおよびリボヌクレオチドニリン酸を単に添加しても、インビトロでのDNA時型からのタンパク質能生は可能でない。しかし下ら、起戦されるようにこの系で塩濃度を特別に調整すると、DNAからRNAへの転写およびRNAからタンパク質への翻訳の両方を可能にする協解物内での条件がつくられてタンパク質の数生が可能になる。

マグネシウムは集合させたリボソームの安定性およびそれらの翻訳中の結合機 能を高めるので、翻訳を最適化するのに重要であることが知られている。マグネ

0.4mIおよび各20μIの最終濃度で抵加することが含まれる。小是優芽抽出物の反応条件は、リボヌクレオチド三リン酸をCTPおよびじTPで0.4mI、GTPで0.5mIやしてATPで1.6mIの最終濃度になるように添加し、一方アミノ酸を20~80μIの最終濃度になるように添加することによって修正される。放射機器したアミノ酸、例えば35Sメチオニンまたは3Hロイシンを共役反応に使用する場合には、対応するアミノ酸はアミノ酸混合物から除く。次いで、SP6、T7またはT3のいずれかのRNAボリメラーゼを、好ましくは50μ1の反応物当たり約80~160ユニットの最終調度になるように添加する。翻訳される遺伝子を育するDNA解型は1μgの濃度で添加し、そして反応容量は水を添加して50μ1に調度する。次いで、反応物は30℃で1~2時間インキュベートする。

行ましい実施思様ではカリウムが反応混合物に透加されるが、マグネシウムとは対照的に追加的なカリウムはタンパク質整生を余り高めることはなく、適当なマグネシウム値が既に存在しているとき僅かな改善を提供するだけである。酢酸カリウムは約59xiの最近最終表現になるように添加する。塩化または酢酸カリウムを必加できるが、マグネシウムの場合より多い量を必加するので、酢酸カリウムが行ましい。約50xiiの園度の環準的な翻訳溶解物館を使用することができ、一万スペルミシンは約0.2xiiの最終適度を与えるように添加される。塩化または酢酸カリウムの最終適度も保障的な溶解物中の当該或分の量に基づいて概算されるが、この遺産はマグネシウム温度と同様内因性成分により量かに変化することを認識しなければならない。

転写と開訳の共役反応の効率または安定性を改善するため所望の追加成分を移 解物に抵加することができる。転写と翻訳の共役反応への1つの過常の抵加は随 延長の効率を高めるのに十分な量のポリアミンである。絶対にそうでなければな っないわけではないが、共役した転写と翻訳では、混合物中で約0.2miの最終値 度のスペルミジンが最適であり、その際この温度でタンパク質配生の増加が観察 される。ポリアミンも同様に最適のマグネシウム値に影響を与え、そしてこれは 関訳反応のマグネシウムの有効適度を使分低下させることが知られている。ポリ アミンは或る値のマグネシウムに代わることができそしてその結果マグネシウム 条件の最適化において、多分転写と関訳の共役の最適マグネシウム値を使らか低 シウムはまたポリメラーゼ語合を見速する校制を果たしていると思われる。 糖収 を最適化するにはカリウムも同様に重要であるが、マグネシウムの場合とは違っ て、共役した転写と間吹ではカリウムイオンの過度は標準的な関吹調製物館を超 えて変化させる必要はない。

カリウムとマグネンウムは復事的なウサギ店解物中に存在している。その億は 1 郵は内部性活解物値によるものであり、そして1部は開取用筋解物に添加されるような信解物の両数中になされた感加によるものである。複解物は異数中に使分分数され、その結果転等と翻訳の共役反応では異数された情解物は50%で使用されるにすぎない。

マグネシウム最度はかなり狭い最適範囲内に調整すべきであるので、熔解的のマグネシウム機は、反応でのマグネシウム量が1つの熔解物パッチから次のパッチまで機準化できるように、追加のマグネシウムを添加する前にマグネシウムアッセイを使用して医療規定することが好ましい。ランサー(Lancer)の「マグネシウム ラピッド ステット ダイアグノスティック キット (Hagnesius Rapid Stat Diagnostic Rit)」 (Oxford Lab Tare Division, Shervood Vedical Co.、ミズーリー州セントルイス) は生物学的液体中のマブネシウム値を正確に測定できるそのような1つのアッセイである。溶解物の所定のパッチのマグネシウムイオン漁度が展知であると、溶解物のマグネンウム機能を最適範囲内にするためまたは皮に表色物の半分として使用される修正溶解物調製物の場合には最適範囲の2 間以内にするため、例えば繊細でれてグネシウムな複数形態の適加的なマグネシウムを仮知の方法で添加することができる。

かくして、ウサギ朝状外血球溶解物の最終マグネシウム濃度を例えば、塩化または酢酸マグネシウムの濃糖溶液を2.5mlより多いが3.5ml未満、好ましくは2.5m 3から3.0mlの間の温度まで添加することによって調整するとも、共役した転写と 翻訳が生じることが見い出された。小変胚幹拍出物を使用する転写と翻訳の共役 化では、約3.0mlより多いが約5.25ml未満、肝ましくは約4.0mlから4.75mlに調整 された塩化または酢酸マグネシウムの最終温度によってタンパク質が膨生される。

転写と翻訳の共役反応の条件には、ウサギ戦状界血球溶解物ではリポヌクレオ チド三リン酸(ATP、GTP、CTP、UTP)およびアミノ酸をそれぞれ各

### 下させる役割を果たすように思われる。

インビトロ環境での最適マグネシウム濃度は俺の条件および理由によっても影響を受ける。例えば、リボヌクレオチド三リン酸濃度が上昇すると、リボヌクレオチド三リン酸消度が上昇すると、リボヌクレオチド三リン酸が溶液中のマグネシウムと金合するかまたはキレートを形成する傾向があるので、最適マグネシウム濃度が付随して上昇する。かくして、上記反応で記載したリボヌクレオチド三リン酸濃度が0.6mmに上昇するとき、転写と開訳の共役反応から得られるタンパク質の数生は大いに低下する。マグネシウムの最適減度はまた細胞溶解物のタイプによって、即ち小皮胚芽抽出物を使用するのかまたはウサギ病状球血球を使用するのかによっても変化する。最適確を違成するために添加される必要なマグネシウム量は、溶解物の濃度が上昇すると溶解物それ自体からのマグネシウムの寄与も増加するので、反応混合物中で使用される溶解物の濃度により変化する。

溶解物混合物中には多数の成分があるため、最適な塩条件以外のもので悪い影響を受けるのはRNAからのタンパク質額訳であるのか、DNAからRNAの転写であるのかまたはそれらの両方であるのかを確実に述べることはできない。 検出可能なタンパク質能が反応中に生成しないという観察はいずれの場合でも同じである。マグネシウム義度を、多分ポリアミン議度によって、少々調整しそしてリポタクレオチド三リン酸温度能が問題とならないことを観察することによって、転写と語訳の共役が観察されるが、これは比較的小さい晩陋による場合だけである。

ジチオスレイトール(DTT)は好きしくは翻訳機合物に抵加される。版写と 翻訳の共役区に加えるとき、DTTは好ましくは約1.45mIの最終過度になるように影加される。最適DTTは小麦胚芽では約5.1mIである。更に、RNasinのようなリポヌクレアーゼインとピクーは内因性リポヌクレアーゼを効果的に不活性化させるために排解物に認加することができる。反応物50点1当たり40単位の過度が放反応の延長を助けることが延期されている。RNasinはウサギ税状赤血球溶解物中での転写と翻訳の共役には絶対的な要件ではないが、小皮胚芽胎出物を使用する転写と翻訳の共役では必要である。後者からRNasinを除くと、鞣溶解物中には系統のリポヌクレアーゼが存在しているので、タンパク質観訳は生じ Wh.

ウサギ側状界血球溶解物での塩化をしくは静酸カリウム、塩化をしくは静酸マグネシウムおよびスペルミジンの好ましい共投転等解釈集度は2.5μ1の最適のトリス/静酸接前液(1πTA緩衝液=33aiのトリス/静酸 pH7.8、65aiの静酸カリウム、10aiの静酸マグネシウム、4aiのスペルミジン、1aiのDTT)を添加して達成することができる。標準的な50μ1のインビトロ■釈反応物に上記緩衝液を添加するとき、この緩衝液は溶解物中のマグネシウム値を全体で0.5ail上昇させる。

クサギ朝状赤血球形解物は製造中に修正することができる。この指揮的は50%の適度(典型的には、50μ1の反応物当たり25μ1の溶解物)で使用されるので、 好きしい修正は酢酸カリウム適度を118mmに、酢酸マグネシウム適度を約5.2mm ら約6.0mmに、モレてスペルミジン適度を0.4mmに関重することに係わっている。 このことによって、50%溶解物を転写と翻訳の共役反応で使用するとき、59mmの 酢酸カリウム、2.6mmがら3.0mmの酢酸マグネシウムおよび0.2mmのスペルミジン の産適長料濃度が与えられる。この溶解物はRNAポリメラーゼ(SP6、T7 またはT3)の1つを、好きしくは50μ1の反応物当たり80~160単位の温度で修 解物に添加することによって更に修正することができる。このような溶解物は必 型になるまで冷凍保存することができる。

スペルミジンも辞ましくは、最適には約0.9mmの最終過度で小麦匹芽抽出物に 感加される。酢酸カリウムは好ましくは約56.5mmの最終過度まで添加される。こ れらの過度は領庫的な小麦匹芽抽出物中のこれら成分の量の概算に基づいている が、健康的な小麦匹芽抽出物を使用する50×10のインビトロ翻訳に5.0×1の1×T 人場面液を感加することによって達成することができ、そして溶解物自体の内因 性成分により優かに変化させることができる。

小党匹券舶出物はまた、溶解物を50%の過度で使用するとき、酢酸カリウム、酢酸マグネシウムおよびスペルミジンの最終濃度が小党匹券の上距反応条件で上記した過度と同じであるように、製造工程中で修正することもできる。小食匹券 抽出物はRNAポリメラーゼの1つを1反応当たり80~160単位の最低濃度で添加することによって製造中に更に修正することができる。修正した抽出物は使用

もう1つの方法は既知量の35Sメチオニンまたは3Hロイシンのような放射機識 アミノ酸を使用しそして使いて、新たに翻訳されたタンパク質に取り込まれた放 耐機識アミノ酸の量を測定して反応を行うことである。この方法の配載に関して は、ジ インピトロ トランスレーション チクニカル マニュアル (the la vitro Translation Technical Menuel)、プロメガコーポレーション、ウィスコンシ ン州マディソン参照。取込みアッセイはインピトロ翻訳反応で座生された全タン パク質 (切断されたタンパク質生成物を含む)中の放射機識アミノ酸の量を測定 する。タンパク質ゲル上で放射機識タンパク質を分離し、そして生成物が適当な 大きさであり且つ二次的タンパク質生成物が塵生されていないことをオートラジ オグラフィーで確認することが重要である。タンパク質磨生の最も正確な測定は、 活性制定を取込みの測定と関係付けることである。

上炉したように、転耳と翻訳の共役反応にはDNA美型の導入が必要である。 インビトロでのタンパク管額訳の更なる増強は多数のクローニング領域の1末端 にポリA配列を含有するベクターを使用して達成されている。好ましいベクター はまた多数のクローニング領域の反対側水塊にSPB、T7またはT3RNAボ リメラーゼプロモーターも含有しているので、ベクター中へのクローニングは5 \* 末蛙にRNAポリメラーゼプロモーターかそして3\* 末端にポリA配列が位産し ている遺伝子を生成させる。クローニングペクターは標準的なインビトロ転写页 応に広く使用されるので、函差的に入手可能な多数のクローニングベクターは 1 つまたはそれ以上のプロモーターSP6、T7またはT3を含有している。ベク ターρSP64 (ポリΑ) はウィスコンシン州マディソンのプロメガコーポレー ションから市戦で人手可能である。このベクターはルシフェラーゼ遺伝子をクロ ーン化するために使用され、放進伝子は続いてウサギ朝状赤血球溶解物を使用す る転写と解訳の共役反応で翻訳された。同じルシフェラーゼ遺伝子はポリAを欠 く別のペクター中にクローン化させ、そして使いて転写と翻訳の共役反応で翻訳 させた。活性アッセイをこれらの反応から得られた産生物で実施したとき、活性 の職害な上昇がポリス構築物を含有する反応で明白であった。

タンパク質の同時難訳および初期の棚駅後等正を研究するためには、転写と翻 駅の共役反応はイヌ陣機ミクロゾーム膜の存在下で実施することができる。シグ されるまで冷凍保存される。

マグネシウム温度を根準的溶解的中に存在する値のままにすると、タンパク質の能生は生じない。反応混合物に1xTA緩動機のマグネシウム以外の能の成分を全て添加するとタンパク質を膨生しない反応が生じる。他方、過剰のマグネシウムを添加すると翻訳も一緒に停止する。例えば、ウサギ機状瘀血染溶解物を使用するが約3.5mIの最終マグネシウム過度を育する間様な反応配合物では、タンパク質の観訳も停止する。この上限は多分、カリウムおよびスペルミジン過度のような他のパラメーター、並びにRNAがタンパク質に関訳されるための最適マグネシウム過度を変化させることが知られているリボヌクレオチド三リン散過度にはって書かに変化する。

修正された小麦胚芽胎出物と修正されたウサギ朝状赤血球溶解物は両骨共、転 写と開収の共役反応の観み立てを促進するキットの部分として含めることができ る。このようなキットは、真核細胞溶解物が調製されそして使用の準備ができて いるので、研究者に対する制使性を改善する。ウサギ朝状赤血球溶解物または小 変胚芽胞出物に加えて上記キットには、DNA舞型を導入して転写と翻訳の共役 を行うのに必要な成分、試異(酵素を含む)および暖罰液を含めることができる。 捨解物は標準化することができ、または塩濃度の興整が軽速中に既に行われてい るか若しくは更には共役した転写と翻訳に必要な1つまたはそれ以上の成分、試 編または最前液も含有されているタイプのものであることができる。

共役したインビトロでの転写と翻訳で厳生されたタンパク質の量は種々の珍様で調定することができる。1つの方法は、翻訳されている特別のタンパク質の活性を創定するアッセイの利用可能性に放存している。タンパク質活性を制定するアッセイの1例はテクニカル ビュレティン (Technical Bulletin) 097、プロメガコーボレーション、ウィスコンシン州マディソン、に記載されているルシフェラーゼアッセイ系である。これらのアッセイはインビトロでの転写と翻訳の共役反応から産生された機能的に活性のタンパク質の量を制定する。活性アッセイでは、不適当なタンパク質の折りたたみのためまたはタンパク質活性に必要な他の翻訳後毎正がないため不活性である全長タンパク質は創定されない。

インビトロでの転写と翻訳の共役反応で復生されたタンパク質の量を測定する

ナルペプチド開設、獲得人、トランスロケーションおよびコアグリコシル化は研究できる修正の機つかである。ミクロゾーム膜の存在下でβーラクタマーゼブリカーサーのクローンを使用する転写と翻訳の共役反応は予期された形態のタンパク質を産生し、シグナルプロセシングが生じていたことを示した。同様に、ミクロゾーム膜の存在下でサッカロミセス・セレビシエ(S. cerevisiae)から得られた②因子のブリカーサーのクローンを使用する転写と翻訳の共役反応は所期のプロセシングされた形態のタンパク質を産生し、グリコシル化を示した。

共役した転写と翻訳はタンパク質のインビトロ翻訳を必要とする任意の方法で 使用することができる。これらの方法には、得られたタンパク質の構造および機 粒を研究するための遺伝子のインビトロ突然変異誘発が含まれる。他の方法は反 応摂命からタンパク質を単離するかまたは精製する目的での存正タンパク質のイ ンビトロ翻訳およびタンパク質の放体を痩生させる目的でのタンパク質のインビ トロ翻訳である。ウサギ朝状赤血球溶解物または小変圧芽始出物における共役し た転写と翻訳の方法は、これらの序が余り時間を必要とせずそして高い値のタン パク質を痩生する点で、表行のインビトロ翻訳方法を超える利点を提供する。

このような静をした転写と開訳の共役反応を使用することにはまた過程または 機動反応を短える多数の利点がある。光ず第1に、2つの系の適用には主要な差 異がある。適能系はタンパク質の大規模な工力の製造用であり、一方静電系反応 は日常の研究者が現在行っているインピトロ側沢に過する。適能的関訳は実施が はるかにより高級であり、装置の投資(1つのAsicon unitには約2,000米ドルか かる)並びにかなりの量の試蔵を必要とする。特に、連続的な真仮生物反応作業 を行うために使用されるRNAポリメラーゼの値は簡単な研究用途には非常に高 値なものである(20,000~30,000単位/反応)。連続的反応は比較的大量で行わ れるように設計されており、一方静電反応は反応容量が典型的には50ヵ1かまた はそれ来側のオーダーにすぎないので、余分の装置を必要とせず且つ少量の試象 しか必要でない。

連載的反応に必要な時間は24から100時間までのいずれかのかなりのものであり、一方静度反応には完結まで僅か1万至2時間しか必要でない。研究者が現在 実施しているインビトロ銀訳では、静度系はインビトロ銀択及符を回避すること



によって大部分の分析または他の研究適用で時間のかなりの節的をもたらす。達 統的反応の組み立ておよび実施の両方に時間が必要であるため、このような系で は転写と開訳が共促していても典型的な研究者にとって正味時間は節的されない。 更に、転写と翻訳の静電共役系では、RNA典型を使用する機体的なインビトロ 翻訳と比較してタンパク質配生の関帯な増加が観察される。DNA典型が3、ポ リA配列を有しているとき、タンパク質配生の更なる増加が静置系で観察される。

リスを打を有しているとき、アンバリ製産生の更なる場別が野症外で収集される。 それ故、一般に、費用の有効性および使用の容易さのみならず他の既知の異核 生物系を組える職等な時間の節約およびタンパリ質産生の増加のため、静鬱系は 共役した転写と観収を日常の研究者に対し利用可能にする。

#### 実施例1

共役した転写と関択をルシフェラーゼ遺伝子を育するDNA締然物で実施した。 反応はルシフェラーゼアッセイ系(プロメガコーポレーション、ウィスコンシン 州マディソン)を使用してルシフェラーゼ酵素の産生をアッセイした。ルシフェ ラーゼ活性はターナー(Turner)ルミノメーターを使用してターナー光単位で削 定される。転写と解釈の共役は次の反応条件下で達成させた:

25.0μ1 標準的なウサギ町状赤血球溶解物

8.0 ul rNTP (ATP, GTP, UTP, CTP) &2.5 N

1.041 SP6 RNA ポリメラーゼ (80単位/41)

2.5µ1 1xTA₩断波\*

1.0 ml R Nasia (40単位/ml)

1.0 ml pSP64ポリA/lucDNA(1mg)環状プラスミドDNA

1.0μ1 1m) アミノ酸 (完全)

9.541 H.O

50. O # 1

\*1xTA緩衝液は33mMのトリス/貯蔵、p87.8、65mMの酢酸カリウム、10mMの酢酸マグネシウム、4mMのスペルミジンおよび1mMのDTTからなる。 この反応物は30℃で1.5時間インキュペートした。1.5時間後、上紀反応から得られた2.5以1の試料は、適所に100倍の光フィルターを有するルミノメーター中で

の共役に必要な他の成分 (例えば、緩衝液やアミノ酸) は捨解物の製造中に添加 できることが示された。私加された成分を有する溶解物は共役反応でタンパク質 を歴生させるためにDNA舞型を導入して使用することができる。

### 実施例4

着々のタンパク質の遺伝子を育するDNA構築物は転写と翻訳の共役反応で試 **競した。放射標準したアミノ酸(355メチオニン)を反応混合物に加えた以外は** 事施例1と同一の反応条件を使用した。メチオニンはアミノ酸混合物から除いた。 反応はSP6またはT7 RNAポリメラーゼプロモーターの後でクローン化さ れたプラスミドDNA網路物を使用して実施した。ルシフェターゼをコードする pGEMLocプラスミドDNAを転写と翻訳の共役反応で使用し、そして放射体 進したアミノ酸の15.3%の取込みをもたらした。これを、転写されたルシフェラ ーゼクローンのRNA等型を使用する複単的なインピトロ翻訳(これは0.8%の 取込みをもたらした)と比較した。これらの反応から導られた試料はSDS/P AGEで実施して、タンパク質産生物がルシフェラーゼの適当な大きさであった ことが確認された。至なる実験はSP6プロモーターの後の8~ラクタマーゼ達 伝子およびS、セレビシエのα因子のクローンを使用して実施した。βーラクタ マーゼのRNA美型を使用する標準的なインビトロ開訳では製造されたアミノ酸 の3%の取込みをもたらし、一方DNA飾型を使用する転写と翻訳の共役反応で は26.8%の取込みをもたらした。 α因子達伝子のRNA無型を使用する無路的な インピトロ親訳反応では0.8%の取込みをもたらしたが、一方DNA鋳型を使用 する転率と駆択の共役反応では12.4%の取込みをもたらした。更に、反応の試料 は皮生されたタンパク質の大きさを確認するためSDS/PAGEゲル上で洗し た。転写と開訳の共役反応でDNA時型から得られた他のタンパク質には次のも のがある: TFIID転等因子、T7プロモーターの後、5%の取込み: Cjun 転写因子、T7の後、13.4%の取込み: βーガラクトシダーゼ、SP6プロモー ターの後、28%の数込み; およびポリ人/luc、ポリ人ベクター中のルシフェラ ーゼ遠伝子、SP6の後、25.9%の取込み。

### 実施例5

共役した転写と翻訳はイヌのミクロゾーム戦の存在下および不存在下でβーラ

アッセイレた。試料は30,000を超えるターナー光単位を生じさせた。 DN人が反 吃から除かれているかまたは 1xTAを含有させない対芻実験ではターナー光単 位は生じなかった。

#### 実施例2

共投した転車と翻訳を小皮胚芽抽出物を含有する反応で同様に実施した。また、 使用されたDNA領鉱物もルシフェターゼ達伝子を育していた。転車と翻訳の共 みはたの条件下で連載させた:

25.0 μ1 福油的な小差胚芽抽出物

8.0 ml rNTP (ATP, GTP, UTP, CTP) \$2.5el

5.0g) 1xTA級街被

1.0 µ1 R Nasin (40単位/µ1)

1.0±1 SP6 RNA ポリメラーゼ (80単位/#1)

1.0±1 pSP84ポリA/lucDNA(1±g)現状プラスミドDNA

1.0±1 1 m) アミノ酸 (完全)

8.0 µ 1 H,O

50.0 µ 1

反応物は30℃で1時間インキュベートした。1時間後、この反応から得られた2. 5μ1の試料は、適所に100倍の光フィルターを有するルミノメーター中でアッセ イした。試料は5.000を超えるターナー光単位を生じさせた。

#### 実施例3

共役した転写と翻訳はまた或る種の成分または試薦を添加することによって製造中に修正された溶解物を用いても実施した。 ウサギ朝状弥血球溶解物の製造中に、分別物をとり分けそして冷凍する前に溶解物にSP6 RNAボリメラーゼを添加した。 SP6は25ヵ1の溶解物当たり160単位のSP6の値になるように添加した。 溶解物は素単く冷凍しそして使用するまで-70℃で貯蔵した。 転写と聞いの共役以応はSP6を至には添加しないことを除いて実施料1の条件に従って組み立てた。 製造中にSP6 RNAボリメラーゼを添加されたウサギ朝状弥血 球烙解物で実施した反応はタンパク質を産生させた。 更なる実験で、転写と翻訳

クタマーゼブリカーサーのDNA機能物を使用してウサギ朝状余血球溶解物で実施してタンパク質の転写後能正を試験した。これらの反応物はオートラジオグラフィーで膨生物を視覚化するために揶揄アミノ酸を育していた。反応物から得られた歴生物はSDS/PAGEゲル上で彼した。ミクロゾーム臓を育さない反応から得たタンパク質塵生物は約81.3キロダルトン(Kd)で移動し、一方ミクロゾーム機を育する反応から得たタンパク質塵生物は約28.9Kdで移動し、シグナル配列がプロセシングされたことを示した。

同様な転等と勝訳の共役支験で、S. セレビシエのα図子のDNA構築物はイ まのミクロゾーム観の存在下および不存在下の両方で翻訳させた。更に、放射標 機能生物もゲル上で流し、そしてその結果は、18.6 Kdのプリカーサーが32.0 Kd で移動するタンパク質にプロセシングされたことを示し、α図子がグリコシル化 されたことを示した。

### 實施例 6

共役した転写と開訳は、熱情環境場方性から得たDNAで実施した。このようなDNAの唯一の要件は増幅されたフラグメントがRNAポリメラーゼプロモーターを有することである。実験はpGEMLucプラスミドから増幅されたDNAフラグメントを使用して実施した。ほられたフラグメントはSP8 RNAポリメラーゼプロモーターの配列およびルシフェラーゼ遺伝子の配列を有していた。このフラグメントを実施例1の条件に類似する条件下で共役反応に導入したと多、ルシフェラーゼタンパク質が適生された。T7プロモーターの後のpGEMEX/運伝子10フラグメント、およびSP6プロモーターの後の8ーガラクトシダーゼフラグメントを含む増幅された他のDNAフラグメントを共役反応で翻訳させた。

本原発明の1つの実施無視を記載したが、本発明の領帯または下記請求の範囲から離れることなく種々の変更および停正をなすことができることは当賞者に明白であろう。

# 特表平6-503477 (9)

	国际共主	M 45 Individual application to PCTALIPSALIES			
A. CLASSPICATION OF PUBLICY MATTER FOCUS (CERT PUBLICATION OF PUBL					
-	Development marcel other this against development in the open that ends debenous or suspend in the field resident				
DILLOG.	Edition day box criticals finding to purposed work lines of day box and, obser producebb, wants lights such DALOGO, SECUSI, MEDIJER, AND REALCH FEMILE, COVERED, TRANSLATION, TRANSCRIPTION, SI VITED				
C. DOC	UNCENTS CONSIDERED TO BE RELEVANT				
دلنحص	Claries of distressed, with philasecon, wheel of	propriess, of the sale		Referent to chips No.	
N) }	90, A. FIRSTER BRAKAMOV ET AL. 21 DOCUMENT:  J. BIOCKEM. WOLLING 12. INSUED 197 MAGNICULUS ACETATE AND DEPLACING ON CHARDS 3V THREEZED? FACES 30.368. ISS WEDLOOV WOLLING 73. ISSUED 1978. SEET VITED TU.NICLIPTION AND TRANSLET VITED	I, BUZURO, "EFF THE RATION OF A ENTIRE DOCUME OF OF YESFULA	ECT OF ECL. TO 8 OLD SQUIM NT. DEES ON THE IN	18:33, 23 -39, 32-46, 43-47, 30, 43-181, 40 -43, 47,742 -34-, 31, 33-34, 41, 40, -34-, 31, 33-34, 41, 40, -34-, 31, 33-34, 41, 40, -34-, 32-34, 41, 40, 51- -34, 32-34, 41, 41, 41, 41, 41, 41, 41, 41, 41, 4	
The contract of a formation of the contract of					
Dott of the actual encaptation of the continuous reach. Drive of making of the constitution county report.					
	1 2 JAN 1993			33/	
	needing address of the ISA/ on of Position on Tradesiate in 1907 APPLICABLE SACIO Research statisticity (1972)a	Authorized officer DAVID B. S.Ch Telephone Mg		Mar.	

	日 数 美 雅 安 PCT/USY2MUH	Apprication Wi-				
C (Comp	C (Company), DOCUMENTS CONSIDERED TO BE RELEVANT					
Cambrida	Chains of degreens, and populate, where appropriate, of the relevant passages	Redreses to them 160				
	WROC, NATL, ACAD, ECI. USA, NOLUME PE, MO, S, BANED AUGUST 1975. RUBERTS ET AL. "EFFICIENT TRANSLATION DY TORACTO MISSAC VIRUS BOM AND RAITY GLOBEN IS UNA UN A CELL-FARE STYTEM HIDM COMERCIAL WHEAT GESM", PAGES 3328-53M, RES ENTISE TOCKMENT.	140				
۲	SCIENCE, VOLUME ME, USUED 25 HOMENERS HID, SHEDI ET AL., "A CONTROUS CELL-RES TRANSLATION SYSTEM CAPABLE OF PRODUCING POLYPENTRIES ON HIGH YIELD", PAGES 1167-1164, SEE SYSTEE DOCUMENT,	1.83				
۲	MUCLEIC ACIDS RES., VOLUME 19, MIANER 13, USUED JUNE 1999, SYANOVA ET AL., "REPATATIVE SYNTHESIS ON A CONTINOUS CELL-PIER SYSTEM PROM BARIT RETICULOCYTES" PAGE OILL SEE FIGURE 1.	1.65				
*	GENE, VOLUME IN, LENERD 1910, BARAHOV ET AL., "GENE EXPLESSION IN A CELL-PARE SYSTEM (IN THE PREPARATIVE SCALE", PAGES 463-466, SEE PIGURE 1, AND ENTRE OCCUMENT.	(-4)				
		<u>l</u>				
}						
	1					
1						